

## 大学生の子育てに対する意識

○山本典子 猪野郁子\*  
(\*島根大学)

目的 少子化が進行している状況のなかで、人々が子育てに希望をもつことができるような環境づくりが社会的要請となっている。その実現に向けての家庭科教育における保育に関する学習の方向性を探るため、子育てに対する意識のあり様と個人・社会志向性との関連を明らかにすることを目的とする。

方法 大学生 173 名を対象に、しつけに対するイメージを問う 10 項目、個人・社会志向性尺度 17 項目、子育てに対する意識を問う 10 項目について、質問紙調査により回答を求めた。

結果 大学生のしつけに対する意識は“あまり楽しくない”とやや否定的な傾向がみられる。性別にみると、女性は男性に比べてより“必要である”と高く認める反面、“楽しいものではない”とより否定的に認識する傾向がある。「個人・社会志向性」の高低により、“明るい”“希望もてる”などの意識に差異がみられ、低い者の方がより否定的に考える傾向がある。したがって、これらが発達しつつある中学生・高校生の時期に、子どもとの触れ合いを“楽しい”と感じることができるよう体験を与え、子どもを産み育てることを選択する際の土壌を育むこと、加えて、子育ては社会全体が責任をもつべきなのだという土壌も育むことが現在の保育学習に求められていると考える。